

## 養蜂めぐり歩き <その3>

### モザンビークの養蜂と課題

筆者は2012年6月から2015年2月まで青年海外協力隊員としてモザンビーク南東部で活動していた。その際日系ブラジル人の養蜂専門家から指導を受け、学んだ技術を現地の農家や普及員に広める機会があった。今回は、モザンビークにおける養蜂の現状と課題を紹介する。

同地はインド洋に面し、海産物資源に恵まれているだけでなく、ヤシやマンゴー、南部ではオレンジなどの柑橘類も収穫できる土地である。そのような環境を蜜源とし、伝統的な採蜜も多くの場所で行われている。いくつかのアフリカの国々で見られるように、幹をくりぬき、樹皮等で蓋をした巣箱が中部から北部にかけて見られる。これには主にヤシが用いられる。また、水を貯める大きめのツボを使い養蜂を行っている農家もある。南部に位置するイニャンバネ州ではタンベイラと呼ばれる木の樹皮から作成した伝統的巣箱が一般的



タンベイラ巣箱

だ。これは樹皮を木から縦約150cm、横約50cmに切り出し、折り曲げて杭を打ち筒状にする巣箱である。この樹皮の香りがハチを誘引しやすいという。多くの伝統的な養蜂は、巣箱を木の上部に設置してハチが入るのを待つという手法で行われているが、このタンベイラ巣箱は雨の当たりづらい木の茂みなどの地上部に置かれるのが興味深い。大型の哺乳類の生息も少なく荒らされる心配がないことと、より簡易で安全なためこの方法が昔から行われていると農家が話していた。いずれの巣箱も、採蜜の際は煙を使い火災の原因となることもあり、また、ハチが入り定着する可能性は低く、収量も近代的養蜂箱の十分の一程度である。

このように、巣箱の形態は地域により異なるが、これらは農家間の情報交換が行われていないのと同時に、養蜂の重要性が郡の普及所レベルで

は認識されているが、各州の農業局を横断するほどの共有がまだできていない現状がある。一方で、様々なドナーから各種の巣箱が供与されている現状もある。近代的養蜂箱はもとより、バートイプやケニアタイプと呼ばれる巣箱が南部を中心に多く見られる。これは管理次第で近代的養蜂箱に近い収量を得ることもできるが、その技術がないまま伝統的養蜂箱と同じようにただ置いてハチが入るのを待つだけという農家グループがたくさんいる。このような状況を改善するため、青年海外協力隊の養蜂やコミュニティー開発の隊員がミツバチの習性の知識や女王蜂の捕獲方法などの技術を広め、伝統的巣箱からこれらの巣箱への蜂群の移行が行われている。



ケニアタイプ巣箱

モザンビーク人の中では、ハチミツは風邪に効く、日本と同じように喉に良いと言われており、需要は大きい。しかしながら、産業としていまだ未発展な部分が大きく、個人の農家やグループが現金収入の一助として近隣で売りさばく、もしくはウィスキーの瓶などに入れて国道沿いで売り歩く程度であり、店を構えて小売りにしているようなことはない。その場合、首都で売られている価格の半分近くで販売されていることもある。また、近代的養蜂箱やケニアタイプの巣箱は援助機関などのドナーが配ってくれるものとの認識がある農家が多いという点も問題である。ただ、最近では農家同士が勉強会を開き、自分達で養蜂箱や、管理、採蜜の際に必要な噴煙器を作成しているグループも出てきている。このような意識のある農家が、次のステップとして、伝統的養蜂箱からの群の移行ではなく、近代的養蜂箱から群を増やしていけるような知識や技術が定着するようになれば、森林管理も含めた生計向上の分野の一つとして成長していけるだろう。